

独り舞台を通して人権問題について考える

「線路は続くよどこまでも」

演目

場所は朝鮮半島の北にある新安州。昭和20年8月16日、日本の敗戦の翌日から物語は始まる。新安州駅の駅長と小宮助役は万感の思いで書類の焼却処理をしている。翌朝からは朝鮮人職員たちと共に朝鮮鉄道の復興と、日本人の本国引き揚げに奔走する。それを支える心強くユーモアたっぷりの駅長の妻。しかし運命は彼らに過酷であり、仕事を失い居場所を失い、家族や仲間も失う悲劇が降り注ぐ。塗炭の苦しみを味わいながら38度線を越えてたどり着いた釜山で待ち受けていたものは？果たして日本と朝鮮半島の人々は理解し合えるのか？戦争という時代の波に翻弄された名も無き庶民のリアルな歴史が鮮明に描かれる。
本芝居の前には、小宮の父の実話から日本と朝鮮半島の鉄道の歴史まで、写真や地図を交えて明快な前説も披露するので、戦争を知らない若い世代にも十分に理解と感銘を与える作品となっている。

出演者

俳優、声優、独り舞台等舞台プロデュース

こみや たかやす

小宮 孝泰 氏



作・演出

鄭 義信(チョン・ウイシン)氏

日時

2022年11月10日(木)

17時00分～18時40分

場所

中央大学 多摩キャンパス FOREST GATEWAY CHUO 3階ホール

主催

中央大学

出演者
紹介

【主な経歴】

神奈川県小田原市出身。県立小田原高校を経て、1979年に明治大学を卒業。明大では落語研究会に所属し、三宅裕司、立川志の輔らの先輩や、渡辺正行や立川談幸などの同期らと落語を研鑽する。この経験は2002年にゲスト出演したテレビドラマ『相棒』(Season 1 第3話)での落語家役に活かされ、劇中では『手紙無筆』を披露する。

大学在学中の1976年、落語研究会と並行して劇団テアトル・エコー養成所に入所し、1978年には研究生となるも、同年に退団。明大とエコーで同期だった渡辺正行と、養成所で一級上だったラサール石井を含めた3人で、1979年に渋谷道頓堀劇場でお笑いトリオのコント赤信号を結成し、杉平助門下で修業する。1980年に花王名人劇場のプロデューサー澤田隆治に見いだされTVデビュー。以後漫オブームの一翼を担う。

テアトル・エコー研究生時代に声優試験に合格したことから、声優としても『宇宙戦艦ヤマト』シリーズなどに参加し、2000年からはテレビアニメ『こちら葛飾区亀有公園前派出所』で擬宝珠夏春都役を演じる(同作の舞台版でも同役を演じた)。

1991年、小田原高校の同級生でテクノバンドヒカシューの三田超人のプロデュースにより、M.C.ハマーのパロディである「MCコミヤ」名義でCDをリリース。

1984年の「赤信号劇団」旗揚げ以降は、タレント活動とともに俳優活動にも力を入れる。1990年代以降は俳優としての活動がめざましく、独り芝居、舞台プロデュースなどに精力的に取り組む。2004年には文化庁文化交流使としてロンドンに演劇留学し、英語劇・英語落語を披露。現在は役者の落語会「ごらく亭」を主催し、毎夏に高座に上がっている。「線路は続くよどこまでも」は、一人芝居と落語の昇華した新しい表現である。

【出演者からコメント】

2008年に「線路は続くよどこまでも」を立ち上げる前に、戦前の朝鮮半島の歴史資料を随分と調べました。やはり相当な差別や理不尽な行動が行われていたことが分かりました。中で印象に残ったのは残虐で苛烈な行為ではなく、劇作家・平田オリザさんの芝居「ソウル市民」で描かれた、普通の人々の無意識な差別でした。頑張れば日本人社会で偉くなれるのよと事も無げに朝鮮人の下男に主婦が言うのです。権利の反対語を差別と捉えるならば真に人権侵害です。でも、果たしてそれを明確に非難できるほど公平で勇気のある精神を私は持ち合わせているのだろうかとか空恐ろしくもなったのを覚えています。

今回は落語に近い形で公演させていただきますが、元は徹頭徹尾エネルギーの放出と情感が溢れる一人芝居として上演していました。

在日二世である鄭義信さんは、日本人と朝鮮人の目線を越えた普遍的な人間愛の物語として脚本を書いてくれました。私の父の朝鮮鉄道引揚の実話や、私の叔母へのインタビューから紡ぎ出された台本には、私の家族の思い出が切な過ぎるほど活かされていました。

劇中で「外地で敵の占領下にある敗戦国民にとって人権などないんです」と主人公の駅長さんが言います。戦争という極限状態では、守られるべき人権も吹き消されてしまうのです。だからこそ、戦争による敗者や勝者という関係ではなく、隣の国の者同士としてお互いの人間愛や権利を認め合おうと必死で訴えているのが鄭さんの台本なのです。そのためには絶対に平和を追求しなくてはなりません。人の権利を守るためには、平和を必死で勝ち取らなければならないのです。何かを守るために何かと闘う。人間世界は矛盾に満ちています。世界に対する前に、自国の同調圧力にも抗わねばならぬ時もあるでしょう。

この芝居を見ていただいた女優の原田美枝子さんから『必死で生きなかつた者などいないのだ』とのお言葉をもらいました。生きるとは闘うことなのでしょう。でもその先にこそ、作中にある『いつか日本と朝鮮が仲良くなったらまた帰って来られる』、『そしたら日本から朝鮮の北まで線路は続いていくはずさ』という痛みや愛を熟知した鄭義信さんの世界観が待っているのだと信じて、私も全身全霊で立ち向かい続けます。

演出家
紹介

【演出家 鄭 義信(チョン・ウイシン)氏の主な経歴】

1957年兵庫県姫路市出身。劇作家、脚本家、演出家。同志社大学文学部中退後、横浜放送映画専門学院(現・日本映画大学)美術科卒業。現在、劇団「ヒトハダ」に座付き演出、作家として、参加。1994年、『ザ・寺山』で第6回岸田國士戯曲賞を受賞。映像にも進出し、映画『月はどっちに出ている』『愛を乞うひと』『血と骨』(全て脚本)で数々の映画賞に輝く。

2008年には『焼肉ドラゴン』で第8回朝日舞台芸術賞グランプリ、第12回鶴屋南北戯曲賞、第16回読売演劇大賞大賞・最優秀作品賞などを受賞(2018年には自ら監督として同作を映画化)。2014年紫綬褒章受賞。

【演出家からコメント】

近所のクリーニング屋のおばちゃんに、「ところで、チョンさんは、お国はどこ？日本語上手だけど、いつ日本に来たの？」と聞かれて、返事に困ってしまったことがあった。「いちおう、僕、日本生まれの、日本育ちなんです……」と、照れたように言うと、「あら、だったら、日本人ね」と、返される。その質問にも、僕は返事に窮する。

けれど、これはいたしかたのないことだ。「在日」韓国人・朝鮮人に対する理解は、たいがい薄い。薄いがゆえに、誤解や偏見、いわれのない憎しみを生んでしまう。教科書からは、韓国人、朝鮮人に関する歴史的事実はほとんど削除され、都合の悪い事実はほとんど忘却の彼方に運ばれていく。なぜ、僕たち「在日」韓国人・朝鮮人は日本にいるのか……そんな単純な疑問も、クリーニング屋のおばちゃんの頭には、浮かばないだろう(クリーニング屋のおばちゃんを責めているわけではないです。おばちゃんは、ただ知らないだけなんです)。

僕は「人権」のことは正直、よくわからない。ただ、あなたの隣にいる外国人に聞いてほしい。

「あなたは、どうして、日本にいるの？」

僕たちのまわりには「在日」韓国人・朝鮮人以外にも、多くの外国人たちが暮らしている。彼ら一人一人に、歴史があり、事情があり、理由があり、日本で生きている。彼らの歴史や事情や理由を知ることが、「人権」の第一歩だと、僕は思っている。

どなたでも聴講いただけます。是非ご参加ください。

※この講演会に関するお問い合わせは、中央大学学事部学事・社会連携課(Tel:042-674-2125)まで